

第23回企画展

立山をめぐる 山岳ガイドたち

Tateyama Mountain Guides



立山カルデラ砂防博物館
Tateyama Caldera Sabo Museum

はじめに

立山・劔岳・薬師岳・黒部川をめぐる数々の登山記録。その陰には、登山者を支える山岳ガイドの姿がありました。北アルプス・立山周辺では、自らの経験や知識・技術をもとに登山に貢献し、登山史に名を残す多くの山岳ガイドが誕生しています。

立山カルデラ砂防博物館では、2009(平成21)年夏季に「立山をめぐる山岳ガイドたち」と題した企画展を開催しました。本書では、企画展で取り上げたテーマのうち特に立山ガイドに焦点をあて、その生い立ち、登山ガイド記録、主な出来事等について、詳細にまとめることを試みました。本書の内容のほとんどは、登山史研究家の五十嶋一晃氏の長年の調査研究に基づくもので、本書は五十嶋氏の立山ガイド研究の集大成ともいえるものです。

立山ガイドの黄金期、そして立山ガイドの5名が第1次南極観測隊に参加してからすでに50年以上の月日が流れました。今では、富山県民でさえ、立山ガイドについては記憶の彼方に追いやられているのが現状です。しかし、彼らの活躍の数々は、富山県にとって特筆されるべきものです。また、精神的な荒廃が叫ばれる現代だからこそ、緑の下の力持ちとして辛い仕事、人の嫌がる仕事を率先して実行してきた彼らの行動力が必要とされる時代なのだと感じます。

本書が、立山ガイドについて知り、彼らの行動に学ぶよき機会となれば幸いです。

立山カルデラ砂防博物館

目次

○はじめに、目次、凡例	2	2. 立山山麓 山岳ガイドの起源	33
立山をめぐる山岳ガイドたちⅠ	3	3. 近代登山の黎明と山案内	37
1. 立山・大山の山岳ガイド	4	4. 山案内人の組織化	41
2. 劔岳と長次郎	6	5. 積雪期登山と岩登りへの対応	46
3. 松尾峠遭難	7	6. 雪山登山撮影行と立山ガイド	52
4. 劔沢の遭難	9	7. 悲愴な出来事	56
5. 黄金期の名ガイドたち	10	8. 現代の立山ガイド	61
6. 立山から南極・ヒマラヤへ	12	○戦後の立山ガイドと遭難救助活動(佐伯栄治)	68
7. 立山ガイドと遭難救助	14	○立山ガイド協会の設立(佐伯友邦)	71
8. 狩猟名人は名ガイド	15	資料編	75
○主な参考資料・文献、協力者	17	1. 立山山麓の山案内人	76
○企画展「立山をめぐる山岳ガイド」展示品リスト	18	2. 立山山麓 山岳ガイドの主な登山案内年譜	79
○写真でみる立山ガイド	22	3. 富山県山岳遭難防止・救助対策の変遷	90
立山をめぐる山岳ガイドたちⅡ	25	4. 登山施設の促進	92
○凡例	26	5. 立山方面山岳ガイドに係わる規約・規則	94
○立山ガイドの村・芦峯(五十嶋一晃)	27	○主な参考資料・文献、協力者	97
1. 近代登山黎明期・隆盛期の立山ガイド	28	○おわりに	

凡例

1. 本書は、立山カルデラ砂防博物館が、2009(平成21)年7月25日から9月13日まで開催した第23回企画展「立山をめぐる山岳ガイドたち」の解説書である。
1. 本企画展は、当館が企画立案し、山岳史研究家の五十嶋一晃氏に監修していただいた。企画展開催の諸準備については、当館学芸員 飯田 肇、是松慧美を中心として福井幸太郎、後藤優介、丹保俊哉が展示を製作した。
1. 本書の編集・執筆は、飯田肇、是松慧美が担当した。また、編集については大東印刷株式会社の協力を得た。
1. 本書中の「立山をめぐる山岳ガイドたちⅡ」は、五十嶋一晃氏に、これまでの立山ガイド研究の成果についてまとめて執筆していただいたものである。
1. 資料の所蔵先をその都度併記した。特に記載のない資料は当館所蔵であることを示す。

1. 立山・大山の山岳ガイド

立山は奈良時代末以降、修験者たちの拠点となった。修験者たちは、玉殿岩屋などで寝泊まりして修行した。やがて、宗教的な山小屋である「室堂」が建てられ、さらに立山山麓に定住し、宗教活動する者も現れた。

江戸時代、立山は加賀藩の支配下におかれ、禅定登山における山麓の拠点は岩嶮寺と芦嶮寺であった。芦嶮寺は、標高400m、常願寺川右岸に位置する宗教村落である。江戸時代末には、38の宿坊が建ち並び、立山禅定登山者の宿泊を担った。立山禅定登山では「中語」（神と人との仲立ちを意味する）と呼ばれる人々が道案内をし、荷担ぎもした。

明治時代には、芦嶮寺、岩嶮寺、上滝に中語案内所があったがスポーツ登山が盛んになるのに伴い、1921(大正10)年、中語組織は改組され、「立山案内人組合」が設立される。初代組合長は佐伯平蔵で、組合員は70~80人であった。その後、佐伯姓では宗作、八郎、源之助(通称：源次郎)、亀蔵、文蔵、利雄、富男や、志鷹光次郎などが名ガイドとして名を馳せた。

また、常願寺川対岸に位置する小見・和田集落においても1921(大正10)年、「大山登山案内組合」が設立されている。初代代表者は宇治長次郎であり、宮本金作など数々の名ガイドが誕生している。

1937(昭和12)年、富山県営鉄道が粟巣野駅まで開通し、翌年の1938(昭和13)年夏から数年の間、駅前に「立山登山案内組合」(代表：佐伯静男)と「大山登山案内組合」(代表：宇治長次郎)の受付が設けられた。隣村同士でもあり仕事上では競い合う形では

あったが、対立ではなくお互い協調関係にあった。それは立山の初代組合長であった佐伯平蔵が、大山の代表である宇治長次郎と公私ともに大変仲が良かったためでもあろう。その後、戦前までの間、山岳ガイドの黄金期が続き、立山、劔岳、薬師岳、黒部峡谷等でガイドやルート開拓に大活躍する。

1941(昭和16)年に太平洋戦争が勃発すると、登山者が極めて少なくなり登山案内組合は休業状態に追い込まれる。大山登山案内組合はこのような状況の中、昭和17年には休業状態に追い込まれ、1944(昭和19)年には自然消滅する。

立山ガイドにおいては戦後、立山の観光開発と登山の大衆化により、案内人組合も有名無実となっていた。多くは山小屋経営などの仕事に就いた。しかし、中高年登山者の増加に伴い、山岳ガイドの需要が再び高まり、1991(平成3)年4月、山小屋経営者やプロガイドらで「立山ガイド協会」(初代会長：佐伯宗弘、協会員38人)が結成された。

立山ガイドは、立山登山の裏方として長きにわたり献身的にその任務を果たした。さらに冬の狩猟の経験から雪山にめっぽう強く、南極・ヒマラヤなど海外でも活躍し、その名を世界に馳せた。



宇治長次郎(左)と佐伯平蔵(右)
写真提供：山村修

立山・大山山岳ガイドの系譜

時代	立山ガイド	大山ガイド
江戸時代	江戸時代、立山登拝登山者の案内をしながら立山開山伝説などを語る中語(神と人との仲立ち)に由来。	江戸時代、加賀藩の奥山廻りに同行した ^{そまびと} 杣人(木樵)に由来。
1921年 (大正10)	富山県令第63号「山嶽・河川・道路案内業取締規則」が施行。この条例により登山案内人は警察署と営林署の管轄下に入る。 ★条例内容 案内業を営む者は、警察署長に案内人の許可申請証、健康診断書、案内できる山の名、登山道、川や溪谷に名前を記載した書類を提出し、警察では書類検査で資格を選抜する。合格したものが筆記試験と体力試験を受ける。	

2. 劔岳と長次郎

●柴崎測量隊による劔岳測量登山登頂

1907(明治40)年、柴崎測量官一行が劔岳へ測量登山として登頂を果たした。その際、宇治長次郎ら大山の山岳ガイドたちが顕著な活躍を見せた。

新田次郎著「劔岳・点の記」では宇治長次郎らが劔岳の初登頂を果たしたと書かれているが、長次郎は劔岳山頂を目前にしながら山頂は踏まなかったという説がある。

1907(明治40)年7月、陸軍参謀本部陸地測量部三角科第四班の柴崎芳太郎測量手(31)は当時「針の山」と畏れた劔岳の初測量を試みる。その際、大山村の宇治長次郎、宮本金作らが案内に選ばれた。

「越中劔岳先登記」(『山岳』第3年第3号)によれば、柴崎は7月12日、劔岳登山に測夫：静岡県榛原郡上川根村 生田信(22)、人夫：上新川郡大山村 山口久右衛門(34)、同郡同村 宮本金作(35)、上新川郡福沢村 南川吉次郎(24)、氏名不詳の5名を選ぶと記されている。

この5名で、急峻な谷の大雪渓をつめたが、途中で氏名不詳と記録された1名が落伍したとある。この人物こそ、後に名ガイドと呼ばれた宇治長次郎と考えられている。長次郎は信仰深い仏教徒であったため、古来より神聖な山として畏敬されていた劔岳の山頂へ足を踏み入れることができず、頂上前で自ら足を止めたのではないかと、という説が有力である。しかし、長次郎がその卓越した技術と経験で柴崎測量官一行を頂上まで導き、劔岳測量登山に大きな役割を果たしたことはまぎれもない事実である。



宇治長次郎(自宅にて)
写真提供：山元寿

●「長次郎谷」誕生から黒部の名ガイドへ

柴崎測量官一行の劔岳登頂から2年後の1909(明治42)年、柴崎らの劔岳登頂に啓発された吉田孫四郎(高岡)、河合良成(高岡)、画家の石崎光瑠(福光)、野村義重(舟橋村)の4人は、登山者として初めて劔岳登頂を果たした。サポートとして宇治長次郎(38)、立村常次郎(33)、佐々木浅次郎(38)が同行し、柴崎測量官一行と同ルートを案内した。長次郎はいざ、頂上へ登る時に幾らかためらいを見せたようであったが、すでに登ってはいけない山というタブーが破られていたため、吉田孫四郎一行を劔岳登頂へと導いた。この時の功績を讃え吉田一行は劔岳登降時に通った谷に「長次郎谷」と名を付け、長次郎の名は今も劔岳に刻まれている。

この劔岳登頂をきっかけに彼の山岳ガイドとしての人生が始まることとなる。後に登山家・冠松次郎と知り合い、大正9(1920)年から約10年間黒部峡谷探検をサポートし、名実ともに名ガイドとしての地位を築くこととなった。



劔岳東面 柴崎隊・吉田一行は長次郎谷左俣から山頂に至る。



春山ガイドをする佐伯平蔵（前左）と栄作（後右）
（写真提供 佐伯栄治）



夏山ガイドをする佐伯平蔵（左）、志鷹光次郎（右）
（写真提供 佐伯栄治）



剣岳山頂での立山ガイドたち 右から佐伯栄作、志鷹光次郎、佐伯平蔵
（写真提供 佐伯友邦）



狩狐中の佐伯栄作
（写真提供 佐伯栄治）



雄山山頂での相撲大会 左は佐伯栄作
（写真提供 佐伯栄治）



杉田寛治の冬山遭難中
（写真提供 杉田三江）



1 国立公園立山登山案内 表



1 国立公園立山登山案内 裏



3 佐伯利雄の案内人許可証



4 立山案内人組合手帳



4 案内人組合手帳 記録



5 立山案内人組合手帳



7 富山県山岳救助隊腕章



7 山岳警備隊バッジ



7 遭難救助民間協力隊バッジ



8 山岳警備隊ワッペン



10 立山ガイド腕章



12 シャクナゲ自製の登山杖



13 山崎吉次郎が使用したピッケル



14 こも



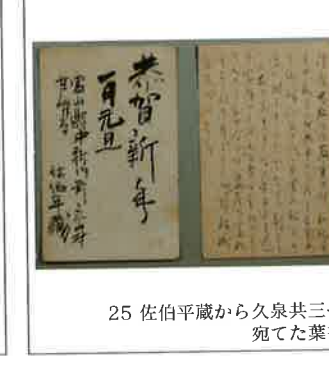
18 宇治長次郎の金剛杖



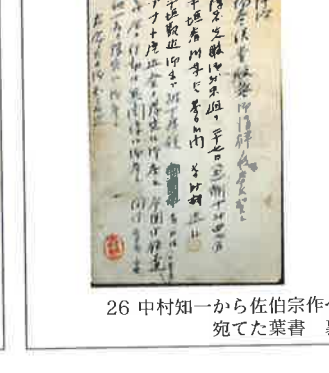
19 一本杖スキー



22 山とスキー 第二十六號



25 佐伯平蔵から久泉共三へ宛てた葉書 裏



26 中村知一から佐伯宗作へ宛てた葉書 裏



37 小学校 国語 四年下

立山ガイドの村・芦峯

五十嶋一晃

立山山麓の常願寺川右岸に、かつて近代登山の黎明・隆盛期に多くの名ガイドを輩出した山岳ガイドの村・芦峯がある。

そこは標高400m前後に広がる丘陵地で、山麓としては珍しく立山連峰が一望できるところである。

古来、立山信仰の基地であった芦峯は、神仏習合の集落であった。明治維新の神仏分離によって廃仏毀釈が激しく行われ、貴重な仏教的文化財が破棄・消滅してしまった。それでも閻魔堂とその周辺および明念坂の石仏群などが現存しており、復元した布橋やわずかに残っている旧宿坊の家や門とか石垣などと、富山県[立山博物館]の展示物、および「立山風土記の丘」とその資料館、あるいは雄山神社祈願殿などによって昔日の面影を偲ばせており、宗教村落としての独特の歴史を感じさせる。

この芦峯は、一山会の古記録によると、一千年有余の歴史が知られており、その氏族は山岳宗教を中心に、特殊な気風を根づかせ育てたことを知る。

立山の開山は縁起では701(大宝元)年から説き起こしており、2001(平成13)年7月1日に立山開山1300年祭が雄山頂上の峰本社で行われた。ただし、歴史学者の定説では開山が200年ほど下っている。

この芦峯には必然的に山案内人が生まれ育った。古くは立山信仰登山の案内役であった中語(ちゅうご)の存在である。中語は日本の山岳宗教の一般的な形態と比べても、類例をみない立山特有の山案内人であった。

宗教登山と平行して黒部奥山廻りの管理登山や測量登山、それに学術登山などが行われ、それらの登山にも中語が伴っていたが、その過程で目的がまったく異なった近代登山が移入された。つまり登山の目的は、山へ登ることそれ自体が楽しみであり、趣味の登山のはじまりである。

中語は登山目的の変化に対応して変質し、探検登山時代から雪と岩の時代の山案内人として活躍することとなる。

明治中期から大正・昭和初期へと続いた日本の近代登山の隆盛期において、芦峯の山案内人たちが果たした役割は計り知れない。輝かしい登攀の先導とともに、一方では悲愴な遭難を身をもって体験した歴史でもあった。現在の立山ガイドは、従来の蓄積されたガイド魂が伝授されてはいるものの、現代の多様化した登山に即応した姿に変化している。

現在の芦峯の特徴として、一つは立山芦峯小学校と、ネパールのエベレスト山麓にあるクムジュン・スクールが姉妹校となり、山岳文化を基本とした教育や環境保全、観光など山岳に関わるさまざまな面で交流していることがあげられる。

立山ガイドとして活躍していた佐伯富男が、1969(昭和44)年とその翌年に、日本エベレスト・スキー隊に参加し、クムジュンのシェルパと出会ったことがきっかけで交流がはじまった。1991(平成3)年11月、エベレストの初登頂者であり、クムジュン・スクールの設立者であるニュージーランドのエドモンド・ヒラリー郷を招き、立山芦峯小学校において姉妹校の提携書が交わされた。これを核にして芦峯とクムジュン村が、1992(平成4)年から毎年交互に、それぞれの村を訪問し幅広い交流を行っている。

二つ目は、布橋灌頂会(ぬのばしかんじょうえ)の現代的復元があげられる。立山信仰の象徴であった布橋は朽ち果てていたが、1970(昭和45)年に復元された。その後、1996(平成8)年に“国民文化祭立山フェスティバル”の一環として、明治初期の廃仏毀釈で断絶した布橋灌頂会が、120年の時を経て現代に甦った。これを機に2005(平成17)年より、芦峯の山岳信仰儀式として復元し、その後布橋灌頂会に準じた行事の年もあるが、毎年執り行われている。

この布橋灌頂会は、霊山立山が江戸時代には女人禁制であり女性の登拝が許されなかったもので、それを救済するために行われていた。現在は癒しを求める現代女性の精神的文化として甦った儀式である。

一方、最近の芦峯は、山村共通の傾向にもれず、人口の減少と野生動物の繁殖から免れられない。2010年3月1日現在、戸数は149戸で以前よりも20%近く減り、1000人以上居住していた村人は、403人の半減以下になった。それとサルをはじめ野生の動物が増え、その共生方法に難儀している状況がある。

芦峯の山案内人とは別に、探検登山時代に主として劔岳および黒部川の開拓を先導し、芦峯の隣村である大山村の登山案内人の活動も、立山山麓の山岳ガイドとして補足的に描きたい。